



独立行政法人地域医療機能推進機構 中京病院 薬剤部 薬剤部長

伊藤 和幸 先生

名城大学薬学部を1987年に卒業、同大学薬学専攻科を経て1988年に中京病院に入職。2022年から現職。JCHO西日本地区事務所統括部医療課薬事専門職を併任。厚生労働省の新型コロナウイルス感染症対策推進本部事務局員検査官としてダイヤモンドプリンセス号乗船の経験に加え、医療薬学専門薬剤師をはじめ心不全療養指導士、医療情報技師、不整脈学会心電図検定1級など多領域にわたる資格も有する。

互いの役割や考えを知り 医療者としての責任を負う覚悟を 持つことがチーム医療の要に。

私が研修生時代に、患者さんのよりよい薬物療法のために、臨床における積極介入を志した当時と、現在とでは薬剤師を取り巻く状況は大きく変化しました。薬剤師の病棟常駐が一般的となる中、チーム医療の一員としてどうすべきかと考え、夢の実現へチャレンジし続けてほしいと思います。

患者さんと直に接した経験が
積極介入を目指す思いに

私の原点は、卒業後に研修生として臨床を経験した時のこと。まだ薬剤師が病棟に行くことが想定されていなかった時代に、辛い思いをしている患者さんを目の当たりにし、よりよい治療のために薬剤師の専門性を活かした介入をしたいと思ったのです。初めて病棟に常駐したのは、それから10年近くたった1996年、「薬剤師が病棟で何をするのか」という懐疑的な目が向けられる中でのことでした。薬に関する説明はもちろん、循環器内科だったため、心電図を読む力も付け、小さな変化にもすぐ対応するということを繰り返してきました。そして気が付けば他職種からの相談も増え、医療者として認められたと実感できました。

チーム医療の一員になるには、2つ大事なことがあると、私は思います。1つは薬学という専門領域に加え、一緒に関わる他職種の領域にオーバーステップするよう知識を広げていくことです。例えば、循環器内科病棟であれば心電図を読む力や各

種デバイスに関する知識があれば、医師や看護師とより深い議論が可能になります。



もう1つは薬物療法を医師と一緒に進める、その責任を負う覚悟です。病棟常駐していた時は、「この病棟にいる患者さんは、すべて『自分の患者さん』だ」という思いで、入院中は責任を持って担当し、亡くなられる時には主治医と一緒にお見送りをしてきました。診療報酬が改定され病棟業務に点数が付くようになったということは、私たち薬剤師が責任を持つべき「義務」になったということにほかなりません。義務を果たして初めて報酬を得られるのは、プロとして当然のことです。

たとえ半歩でも
前に進み続けること
それが夢を叶える唯一の道

当院では、新人薬剤師は医師や看護師、技師などと1ヵ月かけて合同研修を行い、褥瘡予防のための体位交換や点滴ポンプの使い方なども学んでもらっていますが、これは互いの考えや役割を知ることがチーム力を高める重要なポイントだからです。「患

者さんの力になりたい」という共通目標に向けて、一人ひとりが責任感と思いやりを持って取り組むことで、患者さんを中心にした真のチームになれるのです。

学生の皆さんも、それぞれ目指す将来や夢があると思います。私自身もそうでしたが、すぐには叶えられなくてもどかしい思いをすることもあろうでしょう。それでも、たとえ半歩でも前に進み続けていけば、いつか必ず夢に手が届くはずですよ。回り道し

た経験も財産となり、無駄な努力はありません。自分に与えられた仕事、目の前の患者さんに真剣に向き合う中で道は開けていくと信じ、諦めることなく頑張りたいと思います。

